

研究

横川先生と佐伯 (九)

「郷上の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

既に、水田(稲作)、畑(畑作)について考察しましたが、今回は、原野について紹介いたします。

郷上の農牧業 (横川末吉著「郷上の研究」)

3 原野

地理調査所の五万分の一地形図を見ますと、この地方は、原野がとてま広く分布しています。

実際測量したのは明治三十年代(一八九七年頃)ですが、現在とはいくらか違っています。重岡村(宇目町)や小野市村(同)ではことば広く、海岸地方にも多少な

くありません。宮崎県との境の傾山(二六。五以)から宗太郎にかけては、あまり原野がなく、国有林として重要視されています。

重岡駅から水越峠を越えて、更に重岡部落から田代に出るまでの山地は、全部、地形図に原野のしるしがついています。しかし、今はほとんど、つばなくぬぎ、林になっています。

酒利岳(因尾村と重岡村との境にある山、七五三以)の南斜

面や、嶺^{たかね}の北方の広い原野は、秋から冬にかけて、一面黄褐色に色どられます。洪水のどころでお話したように、どこでも、森林が伐採されたのではなく、深山の国有林等では、大木が順次きり倒されましたが、人家に近い、便利のよい所などは、むしろ、明治から大正へと時代に森林が育てあげられたようです。

では、昔は、なぜそんなに、山を原野として利用したのでしようか。

そのままおけば、しぜんに森林となる山をあげあげ、原野としたのは、必ず目的があつたからです。

山間にも、たくさん田があることを述べましたが、あれを思い出して下さい。つまり、刈りたされた青草が、その田の肥料とされたのです。もちろん、牛馬の飼料にもされましたが、そのまま、ただちに田へ肥料としても入れられました。この原野の利用法は、十

いぶん古い歴史を持っていると思います。それは、焼畑農法の保存された因尾村(本庄村)山^{山部}の一畝畝の元山^{もとやま}部^ぶには、今でも、これがほとんど唯一の肥料たそうです。元山部では、小野市村の南田原のような、ゆるやかな斜面の山地が、美しい草地になっています。

深い因尾の谷の水のはえた湖を登りつめて、原野の開けた元山部に入った時、けしきの変化にざいぶん驚きました。

稲の植付けの前には、刈り取った緑草を板でふみこんで地ごしらえをします。一週間もすれば、ばつこうするそうです。秋には、もう一度刈って、牛馬の糞、わらにするわけです。

水の種子は、いろいろな方法で散って行くので、毎年春先には焼いては、林地に落ちるのを防ぎます。

小野市も重岡では、もと、原野の広い時には、炎々として村から村へと焼いたそうです。村の人々の協同作業は、こんな時には、がっちりした村の組織によってじゅうぶん行われたのでしよう。

でも、今は、なぜ、この農法がやんだのでしようか。まるで遺跡のように、元山都だけを残して、他の地方は、どこでも、この農法はやみまじりました。

私は、その原因を、新しい文明を取り入れた結果、肥料が手に入りやすくなったことと、木材が交通の発達の結果、その価値を増してきたせいと考えます。もう、山草はやす所ではなく、すぎを育て、くぬぎを植える所となりました。牛馬の飼料として、ぜひ必要部分を得て、植林の方がよほど利益のあることと思われたのでしよう。もちろん、政府の保護や奨励もあつたのです。

それとともに、いまかに多い草ぶきの屋根が、火災のにがい経験と生活の向上とによって、少なくなつたことも見のがされません。かわらやトタニ板に改良されたのは、大正年間かようですが、ほとんど、ほどこそ方法も変わった恐ろしい火災の教訓を物語っているようです。

小野市の消防団が、木浦の火事にかけていた時も、塩見(宇月町)の火事に行きついた時も、一応火事は終あつていたと聞きました。

少し余談になりますが、切畑村の久土の火事で、私も草ぶきの屋根がいかにか火災に恐ろしいかを、始めて知りました。延焼する時は、まず、かわらぶきの家とばして、向う側の草ぶきに移っていました。

しかし経済上の負担は、なかなかたいへんですから、協同によつて、かわらにぶきかえたお話もありません。

研究すればおもしろいことだと思えます。

屋根の改良によつて、広い草刈場を共同で管理し、毎年順番で屋根をぶきかえていた古い習慣が、多くか村では、しだいに忘れられました。

木浦鉾山では、後ろの広い草刈場の中に畑が開かれていますし、草刈場も、今では、小野市の真弓や木立の岡等に残っているくらいになりました。

四十年間も大丈夫といわれる、リッパ草屋根は美しくあるし、いかに山での生活にふさわしく、地震にも強いのでしようが、やはり、火災にはかえられません。

海岸地方では、火災の外に、風害も、屋根の改良された原因と思えますが、皆さんも考えてください。

では、この、現在残っている草地の将来を想像するとしてしましよう。

アルプス地方のように、牧畜の盛んな所では、美しく管理された山の牧場があるそうです。

県南の草生地帯は、美しい高山植物や滋養に富んだ牧草の茂るアルプスの牧場のようには、ならないのでしようか。それは夢なのでしようか。

名護屋村は、牛の産地として郷土第一ですが、もうすでに、牛の産出上限に達したといわれています。草の不足のためです。これには、私は、原野の管理による外には、よい方法はあるまいと考えます。

春、草地进行焼くことも、私たちの祖先の長い経験から得た、管理の一つの方法でしょう。

この外に、急傾斜の山地の流失しやすい土や、肥料分を保つ方法や、悪い草の品種をどうやって改良するか等も考へられます。

創元は、よい品種の草の種子をまくとか、場合によ

つては、ある程度手入れをするとか、肥料をほどこすとか、皆さんが将来には、残されたまづかーの問題がよこたわっています。

津久見では、原野の草を利用して、又かん畑の夏の乾燥を防いでいます。おもしろいとは思いませんか。

(注)

原野「はら・野原」

緑肥「植物の葉・茎を鮮緑のまま、畑に敷いて、栽培植物の栄養とする肥料。草肥。
げんげ・うまごやし・おぶらななどは、緑肥を採集する目的で栽培する作物である。

草刈場「草ぶきの屋根と深い関係がある。昨今は草屋根の民家が少なくなつた。

野焼「春、草をよく生えさせるため、冬うちの、または春先に野を焼くこと。

牧草「牛馬などの飼料とするいね科・まめ科に属する草類。
牧畜「牧場で牛馬羊などを飼育繁殖させること、またそれき産業とすること。

高山植物「高山に自生する植物。山上は気候寒冷で暖気が短かいため、形が矮して矮小、地に着るものもある。低地に生ずるものとは、おのずから形態を異にし、色彩鮮明、形も共に愛すべきものが多い。イワキキョウ・ミネスズウ・コケモト・ミヤマリンドウ・ハイマツ・ツガザウラの類。

国有林「国家の所有に属する森林で、国有林野法の適用と受けるもの、その経営、管理及び処分は、管林局、管林署が当たる。

宮崎の民謡「刈干切唄」(日向追分)の一節を掲げます。

ここの山の刈干ひきほやすんだヨ

明日はたん風で稻刈るかヨ

もはれ日暮じや追々く水るヨ

駒よいぬるぞ秣ま負まえヨ

屋根は萱ぶき萱壁なれどヨ

昔ながらの千木を置くヨ

おまや米ぬかよ焼いい逢瀬ヨ

こまき母屋の唐黍継きヨ

歌でやらかせこの位な仕事ヨ

仕事苦にすりや日がいヨ

こんな作業歌によつて、広い草刈場を共同で管理し、毎年順番で屋根をぶきかえていた昔の風習をうかがい知ることができます。

駒といふことは、刈りだされた青草が、牛馬の飼料(株)や敷きわらに利用されていたことを物語っています。千木、母屋、唐黍という漢字にも、なつかしさを覚えます。

本五村や宇目町の人々も、昔は、宮崎県の刈干切唄をへくひか暮し方だつたと想像されます。

「宇目の唄げんか」へあるこゝろ見よ、目及め猿まなこ、口はわは口、えんま額へは、歌劇「吉四六昇天」にとりあげられるほど、大分県の代表民謡として有名です。

へ野焼きに関連した野津市の吉四六話を一つ。(久住の山に野火が入って、遠目にも赤々と燃えていた)

季節は三月。

寒風のなかで、吉四六が着物をからげ、むき出しのシ
リを山に向けて、水成なまきすすっていたので、通りが
かりの人は「おまえさんは、なんのおまじないで、この寒
空にシリをまくつてゐるのか」と聞いた。

「あまり寒いけん、山の火に当つちよる」

「ばかいいなさんな。山まで何里あると思つちよるか」

吉四六はせせら笑つて、

「山に雪が降りや、及んや寒いといおうがな。雪が降
つち寒けりや、火が燃えち、ぬくうぬえちゆうほう
あるもんか。……」

吉四六さんがシリをちたためるほど、昔は野焼きが盛
んだったのでしょう。

(注) 吉四六さん、本名衣田吉右衛門、寛永元年(一六二四)白

杉藩野津莊市村(野津町)に生まれ、正徳五年(一七
一五)歿。

佐伯藩の火災の歴史 (その一部)

天和二年(一六八二)三月十一日出火にて内所・船頭所共

に焼失。潮谷寺(浄土宗)・善教寺(浄土真宗)の
二か寺焼失す。火元は本所百姓又兵工也。

貞享五年(一六八八)正月二十三日出火、船頭所・内

所共に焼失。大日寺(真言宗)・潮谷寺の二か寺
焼く。火元は船頭所守右工門なり。

宝永二年(一七〇五)十二月十四日、是は内所のみ焼く。善

教寺焼失。火元は小沢自悦なり。本所と古市所
とに住居する百姓を中村に移す。

享保二年(一七二七)十一月十五日夜出火。船頭所焼く。此

度は大日寺焼く。火元は塩麩屋徳兵衛と林伊右
衛門との境より火起り。

享保十六年(一七三一)二月十四日上野平治兵工屋敷焼失

す。所は西谷なり。平治兵工江戸勤番にて、老
父三休といふ七十七才の首留守致し居たり。

宝暦五年(一七五五)所人共家作只今まで草葎に候迄、草

葎にては不充分に有也。第一火の用心悪しく
候間、瓦屋根に致し候儀申付くべき旨仰出され

候間、家中の者共、今後家作屋根瓦に致し候儀
苦しからず候間此旨申附かせ候。

天明八年(一八二五)十二月十三日曉七ツ半養賢寺(禅寺)出

火、本堂、庫裡共残らず焼失。

現在、佐伯広域消防本部兼消防署(惣工費五九。〇万円)
が佐伯市蟹田区に開設され、消防車、救急車、クレーン
車などが配置されています。

電話の普及で、火災発生のはやは、電話通報に重点が
おかれてゐるので、消防署には望楼が設けられていませ
ん。

また、弥生町番匠と、蒲江町蒲江浦にそれぞれ消防署
分署(工事費各八三五万円)が、宇目町千束と鶴見町地松浦
上浦所に同派出所(工事費宇目町六五。〇万円、鶴見町六四。〇
万円)が設立されて、佐伯市・南海郡の防火体制の万全を
期しています。

さらに、弥生町の尺間山には、消防用無線基地が設け
られて、消防本部や各分署、派出所のほか、所村役場に
ある固定無線局との間で、常時連絡がとられます。無線
で緊急事態の発生をキヤツチすれば、どんな郡部の辺地
でも、二十分間程度で到着出来る体制にあります。

「昭和二十四年頃、名護屋は牛の産地として郷土第一
でした」と横川先生は指摘されています。

しかし、昭和二十六年、名護屋村は真珠の養殖へと方向転換を試みました。真珠景気の波にのって、肥育牛の生産は中止となりました。現在波多津部落に、役牛を兼ねた肥育牛が十頭位残っているのみです。

その後、真珠の不況となりましたが、肥育牛の生産は復活していません。

住民の出稼が等によって、経済状態の難符を留めてい

るようですが、その移り変わりには、ただ驚くばかりです。
規模拡大などで行き詰まっている畜産農家に代わって、県が土地を取得して牧場造成などを行ない、希望者に牧場を安く売り渡すという公社牧場制度が、昭和四十七年度から始められました。

すでに、大野郡千歳村と、東国東郡安岐町とが、事業実施地区となっています。

千歳村の牧場規模は十ヘクタール、乳牛五十頭、安岐町が十二ヘクタール、乳牛五十頭で、共に規模は中々ラ

スで、二年間継続事業となっています。すでに單年度ではほとんど事業は完成し、昭和四十八年度は取り付け道路を残すだけになっています。

一方、安岐町は、取り付け道路の整備は終わり、牧場造成と畜舎建設を急いでいます。
県農地開発公社では「国に事業ワフの拡大も要求したいし、昭和四十九年度からは、希望市町村を組織的に整備し、公社牧場の波及効果が地元で適正に出るよう指導していきたい。」と計画しています。

集団で酪農経営に取り組み、飼料対策などに成果をおげている佐伯市女島酪農団地振興組合は、第五回昭和四十八年度大分県農業賞(優秀賞)を獲得しています。(終)

紀行

再び伊豆路に

—同志と柑橘視察の旅で—

—海江町、会員 富 澤 泰

(一) 静岡県柑橘試験場伊豆分場にて

昨年の五月、私は伊豆の旅行の途次、独りでこの試験場を訪れたことがあるが、今度の再訪は、四月二十五日、ふかん農氏の危機突破の全国集会在東京で開かれ、それに出席した県内の農協代表者柑橘研究会(生産者団体)の代表等が、如何にして年々過剩に、低価格温州みかんの苦境から脱出するかの具体的な事例として、適地適作の難村は何きとりあげるべきか、という課題のもとに、志を同じうする人々二十数名の一行の中の一人名となつたわけである。

昨夜宿った熱海のホテルでは、遅くついで一夜は温泉情緒どころでなく、夜行列車、集會、そして今日の早朝出発にそなえて寝るだけが惜一ぱいであった。それでもホテルの魚の新鮮さは海の国伊豆、山菜の豊富さは山の国伊豆の味を、充分に腹を満ちてくれた。

試験場は貸切バスで直行二時間近く、温泉の街伊東よりさらに南下、稲取の駅上数分、稲取高枝上にある標高百二十坪、東伊豆より南伊豆に延ぶ海岸線への遠望は、きき、伊豆大島を海上遙かに絶景の地だが、小雨のばらつく今日は、島の姿は現れ望もない。試験地は四ヘクタールの敷地の中に、二五ヘクタールの圃場をかまえて、晩生柑橘の栽培試験、並びに貯蔵試験。愛媛と覇を争う静岡